

ロシアの性愛論（7）：去勢派

青山，太郎
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5362>

出版情報：言語文化論究. 13, pp.121-138, 2001-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

ロシアの性愛論 VII

去勢派

青山 太郎

1

これまでロシアの作家や思想家たちの性愛論議を見てきましたが、ここでロシアの民衆に視線を転じ、民衆の内から生まれた特異なセクトたる去勢派について述べます。去勢派はフルイスト派というセクトから派生したものです。フルイスト派と去勢派には共通した要素が多いので、去勢派を知るには、先ずフルイスト派を知らねばなりません。

帝政ロシアは政教一致を国是とし、ロシア正教が国教でしたが、国民のうちにはこの国教を奉じようとしないう者もあり、政府と正教会はこれに手を焼いていました。この反正教會的宗教潮流は、通常「ラスコールと諸セクト」と総称されます。ラスコールは通常「分離派」と訳されるとおり、十七世紀の教会改革の際正教会を離れた人々のことで、改革を受け容れず古い儀式に固執したことから、「古儀式派」とも称されます。分離派には穏健派から過激派にいたる様々な流派がありますが、大略、司祭の存在を認める「司祭派」と、これを認めない「無司祭派」に分かれます。無司祭派は教導者を擁するのみで、司祭も正典も宗規も有さぬところから、次第に正教会はもちろんキリスト教そのものから離れ、キリスト教的要素を多く保持しつつも、新たな道をもとめて独自のセクトを生み出す傾向があります。フルイスト派の場合も、その発生時期（十七世紀半ば）からして、もとは無司祭派に端を発していると考えられます。

フルイスト派の起源については、これを古代ブルガリアのボゴミールの影響とする説があります（メーリニコフの説）。確かに、靈魂と肉体の二元論に立ち、極端な禁欲主義を唱える点で、フルイスト派はボゴミールに似ています。ブルガリアは九世紀半ばにキリスト教を受容して以来、十世紀頃にはスラヴ世界の最強国にして文化的先進国でした。ボゴミールはこの下級聖職者のあいだに興り農民層に弘まった、反正教會的異端運動でした。

キエフ・ロシアがキリスト教を受容するのは十世紀末のことですが、その際ロシアでの教会儀式をスラヴ語でおこなう必要があったため、東ローマ帝国からロシアへ派遣されてくる聖職者は、その多くがブルガリア人でした。ロシアはブルガリア経由でギリシア正教を受けとったのです。さらにブルガリアは十一世紀には東ローマ帝国の支配下に入り、多くの聖職者がこれを逃れてロシアへ来ることとなります。こうしてボゴミールの異端がロシアへも伝わった可能性は否定できません。

ブルガリアにはもともと、グノーシスとマニ教の流れをひくパウロ派という異端がありました。この異端は七世紀半ばアルメニアに興ったもので、福音書とパウロの書簡しか正典と認めないところからこう呼ばれています。パウロ派は、十二世紀にロンバルディアと南フランス弘まったカタリ派の先祖であったろうと言われます。パウロ派も、ボゴミール

も、カタリ派も、いずれも二元論的世界観を擁し、二元論と禁欲主義は不可分の関係にあります。二元論とは、善はすべて天上にあり、地上には悪のみがあると考える考え方です。靈魂を創ったのは善の神だが、肉体を創ったのは悪の神である。世界は度し難い悪であって、ここからは何らのよきものも期待できず、もっぱら抹殺にのみ価する。ここから、世界への一切の嗜好を殺すことこそ善であるという禁欲主義の理念が、不可避的に生じてくるからです。

しかし、思想的観点から両者の親近性がいかに顕著であろうと、フルイスト派とボゴミールを結びつけることは、歴史的観点から見て無理でしょう。なにしろフルイスト派が歴史に登場するのは、ボゴミールが本国ブルガリアで根絶されたのち八百年も経ってからのことだからです。また、フルイスト派の特徴的な儀式は集団輪舞ですが、これはボゴミールにはなかったものです。むしろ、マニ教的二元論は人間精神の或る普遍的なかたちであり、これがたまたまブルガリアやロシアの歴史のうちに発現したものであって、直接的な影響関係はないと考えるほうが自然でしょう。

2

ここで言うフルイスト派の原語は「フルイストウイ хлысты」です。フルイストウイというのは、局外者がこのセクトの信者を呼んだ呼び方であり、信者たち自身は自分たちを、主として「神の人々 божьи люди」と呼んでいました。

フルイストウイは「フルイスト хлыст」の複数形で、つまり「フルイストたち」ということです。フルイストが鞭を意味するところから、日本ではこれまで鞭身教徒と訳されていますが、この訳語は不適切であり、見当違いな憶測のもとになりかねません。鞭身教徒という言葉から、人は漠然と、鞭打ちがこのセクトの特徴であると思うでしょう。確かに鞭打ちは、中世の修道僧などが自らに課した苦行です。しかしフルイストウイの儀式において鞭打ちはなんの役割も演じておらず、この場合フルイストウイの語はまったく別の由来を有しています。フルイストウイは、「フリストウイ христы」（ロシア語でキリスト христос の複数形）を、聖職者・警察・役人らが揶揄的に、あるいはキリストの語を度々、しかも複数形で口にすることを嫌って、わざと訛ったものです。このセクトの信者たちがなぜ「キリストたち」と呼ばれたかという点、それは彼らが多くのキリストを輩出したからです。彼らの地域集団をカラーブリ（船の意。フリーメイソンのロージにあたるもの）と呼びますが、各カラーブリは必ず教導者たるキリストと生神女、さらに大抵は複数の預言者と女預言者を擁していました。その儀式の主たる内容は輪舞（これをラジェーニエ радение と言います）で、彼らはこの激しい身体運動によって法悦に達し、キリスト、生神女、預言者たちは忘我の恍惚状態の内であって、天候の如何、収穫の良し悪し、個人の身上等々を預言しました。預言者には原則として誰でもがなれた。もちろん預言者たる能力には個人差があって、預言者や女預言者になるのは、人一倍靈感を受け易い者たち、恍惚状態に陥り易い者たちでした。

3

フルイストたち自身の言い伝えによれば、その教祖たちの行実とは次のようなものです。皇帝アレクセイ・ミハイロヴィチ（在位1645-76）の時代、ウラジーミル県コヴロフ郡なるゴロジン山の頂に万軍のエホバが降り、コストロマ県の農民ダニエラ・フィリップヴィチの内に入って彼を生ける神とした。当時はニコンの改革に端を発する教会分裂の真最中で、人々はいかなる書物によって救われるかをめぐって争っていた。人が救われるのは古い書物によってか、それとも新しい書物によってか。ダニエラ・フィリップヴィチは、新たな啓示によってこの書物の新旧論争にけりをつけた。すなわち、救われるためにはいかなる書物も要らない。聖神そのものさえあればよい。内心の祈りによってのみ神は人間に宿り、人は救われる。彼は新旧の書物をすべてかますに詰め、ヴォルガに捨てさせました。ダニエラ・フィリップヴィチははじめコストロマ近郊のスターラヤ村に住み、のちコストロマに移った。以来コストロマは「天上のエルサレム」、彼の住む家は「神の家」と呼ばれ、多くの信者を集めます。書物の（つまり教会の）教えに頼らず、わたしの言葉のみを信ぜよ。あるいは、預言者たちが忘我状態で口にする言葉（預言）のみを信ぜよというのが、彼の教えでした。別の伝説によると、ダニエラのことを知った総主教ニコンは彼を幽閉したが、彼が釈放されてコストロマへ帰るまでの間、地上を一面の霧が覆った。コストロマに帰った彼は、弟子たちに「十二誡」を与えた。この十二誡とは次のようなものです。

1. 我は預言者たちにより預言された神であり、人間の魂を救うため地に降り来たった。我以外に神はない。
2. 他に教えはない。他の教えを求めてはならない。
3. 汝の置かれたところに留まれ。
4. 神の誡命を守り、世の漁人となれ。
5. 酒を飲むな。肉の罪を犯すな。
6. 結婚するな。既婚者は妻と兄妹のごとく生きよ。未婚者は結婚するな。既婚者は離婚せよ。
7. 悪罵を口にするな。悪魔、悪鬼等の言葉を口にするな。
8. 婚礼、洗礼式に行くな。宴会に出るな。
9. 盗むな。一コペイカでも盗んだ者は、あの世でこの一コペイカを頭頂に貼りつけられ、これが地獄の火で融けるまで、赦されることはないであろう。
10. これら誡命を秘守せよ。父にも母にも明かすな。たとえそのため鞭打たれ、火で焼かれようと、耐えよ。耐えきった者こそ信者であり、天国を、また地上では霊の喜びを、受けるであろう。
11. 互いに訪れ合い、もてなし合い、愛し合い、我が誡命を守り、神に祈れ。
12. 聖神を信ぜよ。

もっとも、コンラート・グラスというリトワニアの研究者によると、フルイスト派の伝説が伝える教祖たちのうち、ダニエラ・フィリップヴィチについてはその実在を確認する

ことができない。歴史資料により実在が確認されるのは、次のスースロフからだというのです。

万軍のエホバがゴロジン山に降りダニエラを生ける神とする十五年前、ウラジーミル県ムーロム郡マクサコフ村に、母親のアリーナ・ネーステロヴナが百歳の時、神の息子たるキリスト、イワン・チモフェーヴィチ・スースロフが生まれた（これは、アリーナ・ネーステロヴナが生神女を務めていたカラブリーで、スースロフが霊的啓示を受けキリストとなった、という意味でしょう）。

イワン・スースロフが三十歳になった時、ダニエラ・フィリッポヴィチは彼をコストロマへ呼び、神性を授け、彼を生ける神とした。すなわち、スースロフはダニエラ・フィリッポヴィチにより三日間天へ上げられたのちオカ河の岸へ帰り、以後ここの一村を根拠地として教えを弘めた。彼は若く美しい娘を連れており、彼女は生ける神の娘として、また生神女として崇められていた。彼はまた、弟子たちのうちから十二人の使徒を選び、彼らと共に村から村へ布教を続けた。

アレクセイ・ミハイロヴィチ皇帝(在位1645-76)はスースロフの布教活動のことを知って、彼を四十人の信者と共に捕らえ、訊問のためモスクワへ連行させた。しかし司直は彼らから一言の供述も引き出すことができなかった。拷問の火もスースロフの身体を傷つけえず、結局彼はクレムリン前の赤の広場で磔刑に処された。彼は木曜日に息を引取り、金曜日に埋葬されたが、土曜日から日曜日にかけての夜に甦り、モスクワ近郊の村に姿を現した。そこで再度逮捕され、拷問と磔刑に処され、再度甦った。三度目に捕らえられた時、皇后ナタリヤ・キリーロヴナはピョートル・アレクセーヴィチ（のちのピョートル大帝）を懐妊中で（つまり1672年のこと）、スースロフの釈放なくして出産は無事にはすまないという預言があったため、皇帝はスースロフを釈放した。

以後三十年間（つまり1702年まで）、スースロフはモスクワを中心に布教を続けたが、うち十五年間は政府の監視を避けてモスクワを去り、諸所の弟子たちのもとを転々とし、迫害が下火となったのちモスクワへ帰り、ここで男女の修道院に夥しく信者を増やした。彼の住むクレムリン近くの家は、「神の家」とも「新しきエルサレム」とも呼ばれた。

1699年には、百歳のダニエラ・フィリッポヴィチがコストロマからモスクワの「新しきエルサレム」へ移り来たり、ここから1700年1月1日、永い輪舞ののち、多くの会集者たちの見守るなか天に昇った。以後それまでの9月1日に代えて、この日を新年の始まりと定めた。三年後、スースロフ自身も多くの信者たちに見守られつつ昇天した。ダニエラ・フィリッポヴィチは地上に遺骸を残さなかったが、スースロスに残した。信者たちは遺骸を乞い受けてイワノフスカヤ女子修道院に埋葬し、石碑を建てた。

スースロフのあとを継いでキリストとなったのは、ニージニー・ノヴゴロト（現ゴーリーキー市）の元銃士プロコフィー・ダニエロヴィチ・リーブキンなる人物で、一部フルイストたちは、彼をダニエラ・フィリッポヴィチの実の息子であるとしています。彼は1713年から1732年の死まで、キリストの地位にありました。彼の妻アクリーナ・イワーノヴナは生神女で、二人の息子は剃髪して修道院へ入り、ここで教えを弘めます。この頃既にモスクワの十指に余る男子・女子修道院で、多くの修道僧・修道尼がフルイスト派の教えに帰依していました。1732年、ループキンがラジェーニエの最中に死ぬと、彼はイワノフスカヤ修道院のスースロフの傍らに葬られました。しかし彼の眠りは安静ではありえなかった。

この直後フルイスト派の大きかりな摘発があったからです。

1732年、モスクワの四軒の家に深夜人々が集まり、神に悖る行為をしているという密告があり（密告の主はセミヨン・カラウーロフという盗賊でした）、これに基づき七十八人のフルイストが検挙されました。教会と政府は特別調査委員会を設けて事件の解明にあたり、逮捕者は芋蔓式に増え、進んで出頭してくる者も少なくなかったという。翌1733年、委員会の調査に基き判決が出ます。修道尼アナスタシアほか二名の修道僧が斬首。アクリーナ・ループキナは鞭打ちののち修道院へ幽閉。ループキンの息子スピリドン（ループキン死後のキリスト）はオホーツクの監獄へ流刑（のち1744年に恩赦）。その他多くの者が笞刑や流刑に処されました。イワノフスカヤ修道院のスースロフとループキンの墓はとり壊され、遺骸は焼却されましたが、スースロフの遺骸のみは密かにすり替えられ、この時焼かれたのは偽物であったと言われます。

1733年の検挙とそれに続く処刑は、それまでにない規模のものでした。主たる指導者を失ったフルイスト派は暫く鳴りをひそめていましたが、七年後には第四のキリスト、アンドレイ・ペトロフが現れて、1742年モスクワでラジェーニエを始めます。彼らは1745年に検挙され、「クエーカー異端」と呼ばれましたが、実質はフルイスト派です。この時彼らの「神の家」の地中から、最近埋められたとおぼしい屍体が発見されました。屍体はもはや性別も定かではありませんでしたが、状況から見て、これが最初のキリスト、スースロフの遺骸であることは明らかでした。この度の審理は永引き、1752年に至ってようやく判決が下り、クエーカー異端たちはほとんどがシベリアへ流刑になりました。アンドレイ・ペトロフは審理中に獄死したとされましたが、実は、上流階級にも少なからず存在した崇拜者たちが手を回して、彼を救ったとも言われます。彼はのちの去勢派の教祖のひとりアンドレイと、同一人物ではないとも言われるからです。

4

十八世紀半ばから十九世紀初頭までの間に、フルイスト派はほぼロシア全域に行き渡り、国外ではガリシア地方に住むロシア人たちにまで及びました。モスクワには四つのカラーブリがあった。とりわけ信者が多かったのは、オリョール県とタンポフ県であったそうです。信者はさまざまな階層にわたりましたが、主として農民、都市の職人、小商人たちで、また多くの修道院がこのセクトの拠点でした。これは本質的に民衆の内から生まれ、民衆の内に弘まった運動ですが、一部貴族社会にもその影響は及びました。この点、信者がほぼ民衆のみに限られた分離派とは、やや趣を異にします。一例として、「タターリノワのサークル」があります。

カチェリーナ・フィリップヴナ・タターリノワは、ミハイロフスキー要塞に住む連隊長の妻で、神秘思想に傾倒する敬虔な女性でしたが、彼女の主宰する宗教サークルがフルイスト派のラジェーニエと預言を採用し、ペテルブルクの一部上流人士を集めました。十九世紀初頭はロシア貴族の間で、フリーメイソンや神秘思想が非常な流行を見た時代です。ラジェーニエを採用したといっても、これら貴族たちの関心は別段ダニーラ・フィリップヴィチにあったわけではなく、マダム・ギュイヨンやユンク＝シュティリンクといった西欧の神秘主義者たちにあったのです。アレクサンドルー世は当初このサークルに好意的で

したが、晩年は「公的教会に属さぬ宗教団体」に断乎たる措置をとるようになり、タターリノワは修道院へ幽閉されます。彼女は1847年、自らの信念を放棄する旨文書で誓約し、ようやく釈放されました。

フルイスト派は結婚と生殖を認めませんが、ダニエラ・フィリップヴィチやキリストの家系には血統が絶えぬよう配慮がなされていたようです。コストロマから三十キロのスターラヤ村には、十九世紀半ばまでダニエラの末裔と言われるウリアナ・ワシーリエワという女性が生存しており、彼女が修道院へ幽閉されてのちも、スターラヤ村はフルイスト派の聖地ベツレヘムといったものでしたし、ループキン直系の子孫もやはり十九世紀半ばまで存続していました。

十九世紀の六十年代に至り、フルイスト派は個々のキリストを戴く多くのカラーブリに分裂し、それらカラーブリ同士が互いに対立し合うという事態を生じた。キリストたちは信者を自分の側に引きつけるべく、互いに貶め合い非難し合うようになった。もっとも、このことは必ずしもフルイスト派の衰退を意味するものではなかったようで、信者の数は相変わらず増えつづけていると、二十世紀のはじめ、ボンチ＝ブルエヴィチというポリシェヴィキ系の研究者が記しています。

ところでその信者の数ですが、研究者によってこれほどまちまちな数字も珍しい。ロシアで最初の国勢調査が実施されるのは1897年のことで、1902年に公表されたその結果によると、分離派と諸セクト合わせてその数は200万余とされています。しかしこれは当てになりません。フルイストたちは外面的には間然するところない正教徒として生活していましたから、調査にあたり彼らが自らを正教徒として登録したであろうことは、容易に想像できます。そもそもこの国勢調査では、幾つかのセクトに至っては其名さえ出てこない。そこで数字は、個々の研究者の推量に委ねられるということになります。

数字は多数派と少数派に分かれる。二十世紀初頭の時点で、歴史家ミリューコフはフルイスト派にほぼ6万（去勢派には1万足らず）を、コンラート・グラスは15-20万（去勢派には10万）を想定しています。当時のロシアの人口を約1億とすれば、これは些々たる数字でしょう。いっぽう、ボンチ＝ブルエヴィチは、全セクト合わせて600万という数字を挙げています。このうち大半はフルイスト派であつたろうと考えられる。両者の数字にはあまりに懸隔がありすぎます。

5

フルイスト派は、のちの去勢派ほどにはよく組織された教団ではありません。それは半ば自然発生的にさまざまな地方に興った、とすら見える。諸カラーブリ間の横のつながりも、さして緊密なものではなかったらしい。しかし各カラーブリにひとりのキリスト、ひとりの生神女がいて、ひとり、あるいは数人の預言者・女預言者がいるという構造は、共通していたようです。また、儀式のうえではすべてのカラーブリがラジェーニエを採用していたことは事実ですが、儀式の細目については地方により時代により種々食い違いもあり、このことは、セクトが時とともに様々な派に分かれていったことを証するものです。体系的な教義が成文化されず、教導者の意思が神の意思と見做され、カラーブリの全成員がこれに絶対服従するような集団にあつて、これは至って自然なことでしょう。

ロシア正教というのは、概して形式にすこぶる拘泥する宗教です。十七世紀の教会分裂自体、儀式や礼拝の細目における形式の変更をめぐって生じた。そして分離派は、正教会以上に形式主義者でした。彼らは、ニコンの改革が伝統的形式を歪めるものであるとして、旧来の伝統と形式の名において改革に反対したのです。フルイスト派は、ロシア正教のこの形式主義への反動として興ったと言えます。その意味で、ダニーラ・フィリッポヴィチがあらゆる書物をヴォルガへ捨てたという挿話が、フルイスト伝説の冒頭に位置していることは象徴的です。書物や普通の祈りでは生ぬるい。彼らは神性との一層直接的な接触・融合を求めた。つまり激しい身体運動（ラジェーニエ）に訴えて肉体を疲労困憊させ、神を自らの内へ直接呼び降ろそう、神と合体しようとするのであって、これが彼らの祈りなのです。彼らは、使徒行伝に引かれた預言者ヨエルの言葉が実現したものと信じていました。「神いひ給はく、末の世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子女は預言し、汝らの若者は幻影を見、なんじらの老人は夢を見るべし。その世に至りて、わが僕・婢女しもべ はしために、わが霊を注がん、彼らは預言すべし」（使徒 2. 17）。

法悦に達するための舞踏としては、古代の宗教やシベリアのシャーマン等が思い浮びますが、フルイスト派のラジェーニエは他から借用されたものではなく、フルイストたち自身の内で見出され徐々に完成されたものらしい。ミリューコフは、このセクトの民衆起源に鑑み、先ず初めにその外的・儀式的側面が成立したのであり、教義が整えられたのは遙かのち（おそらくは十九世紀）のことであつたらうと言っています。ローザノフも、ダニーラ・フィリッポヴィチは神との直接交流の手段たるラジェーニエを案出したことで、このセクトの教祖となり、生ける神として崇められたものであろうとしています。

神性と直接合体せんという望みは、彼らが人格化された生ける神を求めたことと結びついています。人間が神と直接合体しようというのは、人間が神になりうるといふ人神思想なのです。神の靈感を受けるものにとって、この靈感を神から受けたと考えることから、この靈感が自分の内から流れ出たと考えることへはほんの一步です。彼らが自らを神的な靈感の源泉、つまり自らの内に神を孕む者と考えるに至ったのは、至極当然の成行きでした。あらゆる魂の奥所には聖神の萌芽がある。自らの内へ降りゆく者は、ここに聖神の言ことばを聞き、自らの魂の内に神の国を見出す。自らの内にこの内的福音の声を聞いた者は、その瞬間から「神の宮」となり、もはや肉の内にはなく霊の内にある。これこそ聖神を自らの内に宿すということです。彼らにとってはイエス・キリストも、自分たちと同等な「神の言の藉身」にすぎない。彼らはラジェーニエで、「主よ、われらにイエス・キリストを与え給え」と唱えながら踊りますが、その意味するところは、主よ、かつてイエスに靈感を与えたように、われらにも靈感を与え給えということなのです。こうしてフルイスト派の世界には無数のキリストと生神女が出現したのであり、多くのカラブリーでは、信者同士が互いを神として拝し合うことも行われました。

6

ラジェーニエのやり方については、個々のカラブリーにより多少の違いはあるものの、大筋のところはほぼ一致しており、大略次のようなものであつたようです（十九世紀前半におけるニジェゴロト県アルザマスのカラブリー、コストロマ県ガーリチのカラブリー等。

メーリニコフによる)。

晩の六時頃、カラプリの成員が一軒の家に集まる。人数は十人から四十人。百人に及ぶことは稀である(もっとも、ペテルブルクでのセリヴァーノフのラジェーニエは、六百人を集めたと言われます)。部屋には窓がないか、あっても塞がれていて、音が外部に洩れないよう、しばしば地下に造られている。ラジェーニエの行われる家は、「神の家」とも「エルサレム」とも呼ばれる。

部屋の一隅に生神女が座を占め、信者たちは男女に分かれてベンチに腰掛ける。全員裸足で、長い白衣を着ている。はじめに福音書、使徒の書簡、教父の文章、聖者伝等が読まれることもある。それから自家製の祈りの文句を唱える。やはり自家製の歌を歌うこともある。その際両手で両膝を打ち拍子をとる。歌の合間に十字を切り、主の祝福を乞う。

次いでキリストなり預言者なりがラジェーニエを命じ、一同立って輪になる。時として預言者自らラジェーニエを始め、他の者たちがそれに従う。男たちの輪の外に女たちの輪が形成されることもあるが、大抵は男女入り混じっての輪である。彼らは「主よ、われらにイエス・キリストを与え給え」と歌いながら、飛び跳ねつつ、右回りに回る。輪舞も各人の旋回も、必ず右回りである。つまり、南面したとき太陽が東から西へ動くように、右回りでなくてはならない。この踊りに聖神が降るのであり、「聖なる輪」に入る者は霊により授洗するとされる。踊りは次第に速くなり、人々は息を喘がせて跳ね上がり、手を振り、両足で床を踏み鳴らす。舞踏者たちの回転の速いことは旋風のように、顔も見分けられないほどである。彼らが旋回と跳躍の間中、啜り泣き、声を震わせて奇声を発するさまは、傍目にも恐ろしいほどで、壁越しにこれを聞くと、まるで何かを鞭打っているように聞こえる。フルイスト派が樽の周りで自分たちを鞭打っているという噂が広まったのは、このせいかもしれない。

踊る者たちが自らのうちに霊を感じずるや、踊りはますます速くなる。輪の外で拍子を取り声をかけている者たちは、舞踏者のとりわけ激しく速い動作を認めるや、「彼に恵みが降った」と言う。こうして預言者や女預言者が出現する。ラジェーニエ中にはなにも考えてはいけない。さもないと霊は降らない。預言者や女預言者になる人々は、概してラジェーニエへの強い嗜好を有しており、彼らにとってラジェーニエは、集中した断食ののち、言い知れぬ喜びを伴って自ずと起こるのだという。人々はラジェーニエを、それがもたらす陶酔ゆえに「霊的ビール」と呼んでいる。フルイスト派の教義が肉食、飲酒、夫婦の交わり等の厳しい禁欲的節制を課するものであったことに鑑みれば、ラジェーニエによる心理的陶酔が彼らにとって不可欠であったことは、想像に難くありません。

踊りは大抵夜半まで続く。白衣が汗でぐっしよになると、白衣を脱ぎ捨て、裸のまま倒れるまで踊る。

踊りが終わると全員が腰をおろし、手で膝を叩いて拍子を取りながら歌を歌う。それから教導者に向かって跪き、十字を切り、聖神が預言者の口を通して彼らを訪れるよう祈る。選ばれた預言者が人々に向かい合って立ち、身体を動かしながら、大きな声で預言を始め。はじめに全員への預言があり、そのあと個々人への預言がある。預言者は個々人の罪を暴き、罪人は十字を切って罪を悔い、時に涙を流して預言者を拝する。

預言はしばしば明け方近くまで続く。預言が終わると全員で「キリストは甦り給いぬ」を歌い、教導者は十字架を聖像の下に置き、一同は跪拝して十字架に接吻する。

7

フルイスト派にとって霊は善であり、肉は悪であり、ラジェーニエは霊によって肉を克服する手段であるわけですが、日常生活においても霊は肉に打ち勝たねばならない。最初の罪はアダムとエヴァの肉の交わりによって生じた。普通の正教徒たちは変わることなく罪のうちに生まれ、罪のうちに生きています。罪を免れるには、この世と訣別せねばならない。これは祈りと断食と、肉欲を断つことによって達せられる。概して、女と交わることは、フルイストにとって最も重い罪です。肉、魚、玉葱、大蒜^{にんにく}を食べてはならない。酒を飲んではいけません。遊びの集まりに行ってはならない。悪罵を口にすることはできない。女は華美な服や飾りを身につけてはならない。被ったショールはなるべく深く眼まで下ろして結び、常に慎ましくあらねばならない。これらの誠命をすべて厳しく守る者は、来世で永遠の生命を得るばかりか、ここ現世でも聖神の恵みに与り、神の息子ないし娘に等しいものとなる。つまりキリストないし生神女となる。「我が誠命を守りわが道を保つ者は我に在り、我もまた彼に在るなり」(ヨハネ第一書3.24)。イエス・キリスト自身そうした神の藉身に他ならなかった。罪と訣別し新たな生へと生まれ変わり新たな霊となったわれわれは、言たる神が宿るに相応しい者たちである。男たちは皆キリストであり、女たちは皆生神女である。

人間は教義や理屈によってではなく、その生き方によってのみ救われるというのがフルイストたちの信念であり、彼らの信仰の外にある者たち、つまり彼らと同じ生き方をしない者たちはすべて、永遠の苦しみのうちに滅びねばならないわけで、正教の聖職者たちもその例外ではありません。「われわれは司祭たちを神学者として尊敬する。しかし彼らの生活に倣うことはできない。彼らは妻を持ち、子供を生んでいるから。司祭たちは酒を飲むが、酒は遊蕩である。司祭たちは肉を食べるが、肉は肉欲を生む。それゆえ司祭たちには罪を赦したり、自らの祝福により聖神を伝えたりすることはできない。彼ら自身聖神を欠いているのだから」。

フルイスト派は司祭たちの執り行う機密の聖性を認めず、これに代えて自分たちの発案になる儀式(ラジェーニエ)を採用したわけですが、彼らは正教会の機密を魂にとってなんの益もないものと見ているものの、とりわけこれを忌避しているわけではないのです。それどころか彼らは絶えず教会へ行き、痛悔をし、聖体礼儀を受け、寄進をする等、教会の要求する務めはすべてこれを果たし、外面的にはこの上なく敬虔な正教徒として振舞っています。彼らが教会へ足繁く通うのは、主として偽装のため、自分たちの信仰を秘匿するためですが、決してそれだけではないことを、プルガーヴィンというナロードニキ系の研究者が指摘しています。彼らが教会へ行くのは、真実そこで祈るためでもあるのです。人一倍篤い信仰心の持主である彼らは、できることなら教会でも祈りたい。しかし教会には、祈りを妨げる雑音が多すぎる(人々の出入り、巡査の巡回、蠟燭の売り手たち等々)。教会では祈りに精神を集中させることができない。彼らがラジェーニエを発案したのは、これによって教会の儀式を廃するためではなく、教会の不完全な儀式を補うためだったのです。彼らとしては、教会に楯突く理由は別段なかった。教会上層部はフルイスト派の教義を異端と見做し、これの根絶に努めましたが、教会組織の末端において、教区の司祭ら下級聖職者たちとフルイストたちとの関係が概して良好であったのはこのためです。教会

に行くことをこれ見よがしに拒否し、教会のすることにことごとく楯突いていたのは分離派であって、その反教会性はしばしば反権力に移行しましたが、フルイスト派は政治には頓と無関心でした。

ローザノフにフルイスト派探訪記があります。公的筋の或る人物が、結婚と生殖の擁護者として知られるローザノフを、名だたる禁欲主義者フルイストたちに引き合わせようと考えた。ローザノフがこの人物の案内でペテルブルク郊外のフルイスト派を訪れたのは、1904年頃のことです。かれはここでラジェーニエに立会ったわけではありませんが、フルイストたちと腹藏のない意見を交換した。

人はフルイストになるのではない、フルイストに生まれつくのだ、というのがローザノフのフルイスト観です。この世には、フルイスト派のカラーブリにおいてしか落着きを見出せない人々（ローザノフの持論によれば、性的力が先天的に±0であるような人々）が存在する。彼らは通常の間人社会にあつては身の置き所がない。どこにいても居心地が悪く、周囲の人々とうまくやってゆけず、他人の仕事の邪魔をすることしかできない。この種の人々がフルイスト派のカラーブリに自らの居場所を見出すのだ、ということです。概して、十九世紀までの観察者たちが見落としており、二十世紀の研究者たちによりはじめて指摘された事実とは、彼らフルイストたちが真実宗教心溢れる人々、宗教的飢渴を人一倍多く有する人々であったということです。正教会は彼らのこの宗教心に応えることができず、満たされぬ宗教心はフルイスト派のラジェーニエに赴いたのでした。

8

フルイストたちが頻繁に教会へ通い熱心な正教徒を装うのは、ひとつには、新信者勧誘のためでもあります。信者の勧誘には、常に多大の精力が傾注されていました。メーリニコフの著書から一例をかいつまんで紹介します(ニジェゴロト県アルザマスのカラーブリ、マカリエフ郡のカラーブリ等)。

仲間引き入れようとする者には、先ず自分たちが正真正銘の正教徒であることを確信させる。「司祭たちはわれわれに何も教えてくれない。だから自分で本を読まねばならない」と言い、絶えずキリストに祈り、なるべくしばしば教会へ行き、正教の司祭を敬うよう教える。やがてこう教えるようになる、「この世には聖神の恵みを有する義しい人々がいる。こうした人々の内にこそ神は生きている。彼らこそ縛りさば審く力をもち、罪深い魂を地獄から天国へ導くことができる」。しかしこうした人々が誰で、何処にいるかは言わない。次いでこう教える、「あらゆる災厄を、迫害と苦難を耐え忍べ。節制した生活を送り、万事にわたり自らを卑下し、万人に仕え従え。肉を食べず、酒とビールを飲まず、煙草を吸うな。悪魔の名を口にするな。よんどころない場合にはただ『敵』、『悪しきもの』と言え。世俗の歌を歌わず、踊らず、作り話を話したり聴いたりするな。常に純潔のうちにあれ」等々。やがて自分たちの集まりを訪れさせる。といつても、はじめは教会の本を読み解釈し、時折ダビデの詩篇を歌うにとどめる。相手がすっかり彼らを信じきつたと見るや、こう打明ける、「聖神を有する人々は、われわれの内にこそいる。真のキリストの信仰は地上では滅び、われわれの集団でのみ生きている。いかなる書物も必要ない。必要なのは『生命の書物』、つまり人間のうちに生きていて、神を受け容れうるもののみである。神は

常にわれらと共にあり、われらの集団に入った者には聖神が降る。ちょうど昔使徒たちに降ったように」。

新人がセクトへの加入に同意するや、彼は数日間の断食と齋戒を命じられる。定められた日に、セクトの教導者ないし長老が彼を迎えに来て、信者たちの集会へ導く。そこには信者たちが全員裸足に白衣姿で、男と女に分かれてベンチに坐っており、前方にひとりの女性（生神女ないし女預言者）が聖像の下に腰掛けている。広い部屋には沢山の蠟燭が明々と灯されている。生神女は新人に尋ねる、

「ここへは何のために来たか」

「魂を救うために」と新人は、予め教えられていたとおりに答える。

「魂を救うのはよいことである。で、汝は誰を保証人とするか」

「天の王たるキリスト自身を」

「キリストを辱めることのないよう努めよ」

次いで新人は聖像に向い誓いを立てる。誓いは次の三点から成る。

1. 聖なる信仰を受け容れ、決してこれに背かない。
2. しばしば教会へ行き、痛悔をし、聖体礼儀を受けるが、司祭に新たな信仰のことは一言も洩らさない。
3. 聖なる信仰のためにはいかなる苦難にも耐え、牢獄も、シベリアへの流刑も、死すらも恐れず、自らの信仰を誰にも決して明かさない。

そのあと新参者は教導者の命ずるところに従い、一同が彼のために祈るよう頼む。一同は円くなって坐り、彼らが「主への祈り」と称するものを民謡の節で歌う。一同歌いながら、右手で膝を叩いて拍子をとる。次いで三、四人の男女が円のなかへ出て、跳ねながら右回りに回り始める。こうして新信者加入の儀式は、ラジェーニエへと移行する。

9

ロシアにあっても国外にあっても、フルイスト派は永いこと忌まわしい淫祠邪教のたぐいと考えられてきました。鞭打ちを意味するその名称ゆえばかりではない。下着姿の男女により深夜人目を避けて行われるラジェーニエが、人々に性的放縦と乱交を連想させたのです。この風説は非常に早くから存在したもので、1734年の調査委員会による報告書が既に、ラジェーニエのあとの乱交を示唆しています。既述のとおり、フルイスト派の教義には、この教義の内容を一切局外者に洩らしてはならないという一項があり、そのため信者の側からの論駁の試みが全くなかったことも、この風説を横行させる一因でした。

ハクストハウゼン男爵 baron August von Haxthausen (1792-1866) といえば、ドイツはウェストファーレン出身の法学者で、グリム兄弟などとも一時親交のあった人物ですが、彼は1843年にロシア国内を広く旅行し、この調査に基づいて『ロシアの国内事情、国民生活、農村の構造』（全三巻 1847-52）という本を書いています。彼はロシア政府の助成金を得てこの調査旅行を行ったのですが、これは彼がポメルン地方（現ポーランド領）の土地所有制度を調べていて、ここに先住民たるスラヴ人の農村共同体が残存していることを知り、ロシアの農村問題に関心を抱いたのがきっかけでした。彼はロシアの農村共同体の存在を初めて指摘した人物ではありませんが、少なくともこの重要性を西欧に、さらに

はロシア人自身に知らしめた人物として、ロシア史に名を留めています。

『ロシアの国内事情』は、旅行記の体裁でロシアの農村問題のみならず広くロシアの文物を扱っており、宗教事情に関する章では、ロシアの諸セクトとしてのフルイスト派や去勢派にも触れています。フルイスト派の儀式について、彼はロシア人の秘書から聞いた話としてこう記している、

「……祈祷の際、湯を満たした樽のなかに十五、六歳の少女を坐らせる。数人の老女が彼女に近づき、その胸を深く切開し、左の乳房を切り取り、驚くべき巧みさで出血を止める。(……) それから切り取った乳房を皿に載せ、小片に切りわけて一同に配り、一同はこれを食べる。この人肉食が終わると、特にしつらえた高い台に少女を坐らせ、歌いながらその周りを回る」。

ハクストハウゼンのこの記述を信頼に値すると見、わたしも同様の話を聞いたとして、同じ乳房嗜食の話を紹介したのは、メーリニコフです(『白い鳩たち』第10章)。そして彼はここに、嬰兒供犠の話をつけ加えた。生神女である少女が男の子を産んだ場合、この男子は生まれて八日目に、キリストに倣い脇腹を刺されて殺され、一同はその生血で聖体礼儀をとり行い、屍体は乾燥させて粉にし、パンに焼いてやはり聖体礼儀に使われる、というものです(もっとも、この噂が警察の審理調書によって確証されたものでないことは認めています)。深夜の密儀と乱交、人肉食、嬰兒供犠等は、大衆の猟奇趣味にはなはだ適っていました。また、ロシアをヨーロッパの秘境と見做したがる西欧人の好みにも適っていた。ハクストハウゼンとメーリニコフのこの記述は、大衆のフルイスト像を決定してしまった。

ロシアの作家たち自身例外ではなかった。彼らは、キリスト教と異教の対立、ロシア精神風土の二重性(近代化された表層と、その下に潜む前近代的深層)等のテーマを扱う際、好んでフルイスト派にロシアの前近代を代表させたものです。一例として、メレシコフスキーによる歴史小説三部作の第三部『反キリスト(ピョートルとアレクセイ)』(1904)を挙げておきます。ここでメレシコフスキーは、青年貴族チーホン・ザポリスキーの宗教遍歴を描いており、チーホンはフルイスト派への入信式で生神女の裸身に接吻し、輪舞はやがて乱交へと移行する。

ベールイの長編『銀の鳩』(1910)には、「鳩のセクト」という架空の宗派が登場して、主人公の大学生ダリヤリスキーを破滅へ追いやりますが、このセクトのモデルも明らかにフルイスト派です。

十九世紀も末になると、ナロードニキ系の研究者や、さらには正教会関係者たちの間からも、フルイスト派をめぐる乱交、流血の儀式、人肉食等が事実無根であるとの指摘がなされるようになり、二十世紀にはこちらがほぼ定説となりますが、大衆の間では、相変わらず古い偏見が巾をきかせていたようです。

乱交が実際にあったかどうかというのは、フルイスト派をめぐる主たる争点のひとつですが、ローザノフも乱交はなかったと見ています。フルイストに子供が生まれえないというのは正教会の布教師たちが例外なく報告するところであり、また正教会による反フルイスト派キャンペーンのパンフレットは、その大部分が『フルイスト派に抗して結婚を擁護する』、『性行為を擁護する』等と題されている。正教会の布教師たちによるフルイスト派への非難とは、キリスト教神学としては奇妙なことですが、「なぜ諸君は性交をしないのか。

性交せよ。これは神の意志である」というにある。そもそも実際に乱交があったのならば、子供は夥しく生まれている筈だということです。

もっとも、個々の場合には随分といかがわしい例もあったかもしれない。やはりメーリニコフの挙げている例ですが、ワシーリー・ラダーエフというアルザマスのキリストの場合がそれです。彼は、「神秘的な死を死に、神秘的に甦って」キリストとなった者にはすべてが許されるという、一種の超人思想の持主で、これに基づき自らのカラブリの十三人の女たちと関係をもっていました。彼は女たちに向って、自分がこれを要求するのではない、自分の内なる神が要求するのだと言って女たちに関係を迫り、彼女たちはこれを拒否できなかつたといいます。カラブリの成員は、自分たちのキリストに対しては絶対服従の義務を有し、キリストの命令とあらばいかなる法も眼中にないという有様でしたから、このキリストが不心得者であった場合はとんだ事態が生じかねない、ということはあるでしょう。

10

フルイスト派から去勢派が派生します。つまり、去勢派の教祖コンドラチー・セリヴァーノフは当初フルイスト派の信者だったのですが、百尺竿頭に一步を進めて、その禁欲主義を解剖学的な去勢手術にまで突きつめた。去勢手術を受けることを彼らは「白くなる」と称し、フルイスト派が「神の人」と自称したように、彼らは自らを「白い鳩」と称しました。

十八世紀の七十年代、トゥーラ県にアンドレイとコンドラチーという二人の放浪者が現れます。二人はキエフの修道僧にして隠遁者であると称していましたが、このうち年嵩のアンドレイとは、かつてのクエーカー異端の教導者で、有力者の庇護により司直の手を逃れたアンドレイ・ペトロフではないかと言われています（メーリニコフの説。グラスによれば、このアンドレイはペトロフではなくイワーノフであり、そもそもアンドレイとセリヴァーノフは同一人物であるという）。やや若いコンドラチーは、オリョール県ストルポフ村の農民でした。二人はアレクシン郡のフルイストたちに、真の信仰の実践には「白くなる」以外に道はないと説いて、数人の農民を白くします。1772年はじめ、アンドレイとコンドラチーは、タンボフ県モルジャンスク市近くのソスノフカ村に腰を据えます。ここにはアクリーナ・イワーノヴナ・ループキナを生神女とするカラブリアがあり、千人からのフルイストを集めていました。カラブリア随一の預言者はアンナ・ロマーノヴナという女性で、預言の適確なことで近隣に知られていました。信者たちの集まりではいつも末座に控えていたセリヴァーノフの内に、初めて強度の神性を感じ取ったのは彼女だったそうです。アクリーナ・ループキナも彼の内に生ける神を認めた。彼は結局ソスノフカのカラブリアには容れられませんでした。晩年に至っても、アクリーナ・イヴァーノヴナのことは敬意をこめて口にしています。

セリヴァーノフはソスノフカ村で六十人にのぼる信者を得（つまり去勢をほどこし）、フルイスト派から分かれて独立のカラブリアを形成し、ラジェーニエを行うようになります。ラジェーニエのやり方は、フルイスト派のそれをそのまま踏襲しました。モルジャンスク市とソスノフカ村は、のちのちまで去勢派揺籃の地と言われることになります。この

時去勢して信者となった者たちのうちに、ソスノフカの輔祭と堂務者が含まれていました。村の司祭はこのことを重大視してタンボフの主教に報告し、主教は宗務局に報告し、事件はかくして宗務院にまで達します。これが去勢派に関して記録に残る最初の事件です。八月には判決が下り、アンドレイは笞刑ののち懲役刑、主だった信者たちは懲役のためリガのジナミント要塞へ送られました。セリヴァーノフは審理中に逃亡しますが、二年後に逮捕され、やはり笞刑ののちネルチンスクへ終身流刑になります（実際は、イルクーツク県までしか行かなかった）。ほぼ同時にオリョールやトゥーラでも去勢派に対する裁判が行われ、セリヴァーノフの愛弟子にして主たる協力者、「先駆者ヨハネ」と呼ばれたアレクサンドル・シーロフが、やはりジナミント要塞へ送られています。

このシーロフという人物は、セリヴァーノフに心酔する熱心な布教者であり、その意味でセリヴァーノフにとって先駆者ヨハネであるよりはむしろ、使徒パウロのような存在であったと思われます。師の「白化」の思想を実行に移し、先ず自らを去勢し、次いでセリヴァーノフに去勢を施し、さらにアンドレイその他を去勢したのは彼であったと言われます。

11

ソスノフカのカラーブリで初めて潜在的なキリストとして頭角を現す以前から、セリヴァーノフはフルイストとして諸所のカラーブリを経めぐっていましたが、その際フルイストたちがダニエラ・フィリップヴィチの純潔の誠命を守っていないことに憤慨しました。確かに彼らに性交はない。しかし彼らがやはり女に惹かれていることに変わりはない。「誰もが官能の金縛りに遇っており、女と同じ場所に坐ることしか考えていない」。ここで官能と訳したのは、リェーポスチ *лепость* という語です。これは本来「美しさ」という意味ですが、セリヴァーノフはこれを「女の美しさ、女の魅惑」、ひいては「肉欲」、「性」の意味で用いています。その禁欲的教えにもかかわらず、フルイストたちの内にはなお官能が残存している。この「凶暴な蛇」に打ち勝ち、淫蕩を根絶することが、彼の生涯の仕事となります。

フルイスト派のキリストたちとは異なり、セリヴァーノフには『受難』と呼ばれる自伝ないし回想、『書簡』と呼ばれる説教等、若干の文章が残っています。もっともこれらは彼自身の手になるものではなく、後年彼の話をも弟子たちが筆記したものです。彼は文盲であったとも言われますが、これは事実ではありません。彼のものと思える手紙も、短いものですが幾通か残っているからです。因みに、彼はしばしば思い描かれるようなユロージヴィ（愚者を装った乞食行者）風の人物ではありませんでした。稀なほど穏やかな眼差しこの老人が、或る種の明晰な知力と計算を蔵していたことは確かなようです。

「官能が世界を啖い尽くし、神に背かせ、神に至ることを許さない。それゆえ官能の滅びの中で、多くの教父は教えを、預言者は預言を、聖人と苦行者はその功業を失い、天国に辿り着けず、永遠の宝を滅びの生活に見替えてしまった。〈……〉童貞と純潔を保て。〈……〉無駄口をたたくな。無駄口からは悪しき官能が生じ、これを根絶するのは容易ではない。〈……〉悪しき官能を遠ざけ、男は女と、女は男と、無駄口や笑いを交わすな。笑いから官能は生ずる。けだし官能とは磁石のようなもので、その特性は近くにある鉄を惹きつけることだが、女の魅惑も同様に、女と真近く交わる男をその生まれながらの特性によつ

て惹きつけ、知らぬ間に人心へ入りこみ、衣魚^{しみ}のようにあらゆる徳を食い尽くし、神の恵みを放逐する」(『書簡』)。

彼はフルイストたちを非難し、行いを改めるよう説きますが、フルイストたちはこのことを煙たがり、預言者たちは彼が法を変えようとしているとして逆に彼を責め、フルイストたちを彼にけしかけました。

セリヴァーノフは説得が効なきことを知り、一層断乎たる手段に訴えねばならぬと考えた。「蛇は一刻も早く息の根を止めねばならない。首にとびつかれ噛まれてからでは手遅れだ」。聖書にも「もし右の目なんぢを躓かせば、抉り出して棄てよ。もし右の手なんぢを躓かせば、切りて棄てよ」(マタイ伝 5. 28, 30) とあるではないか。躓かせるものは切除せよ。こうして彼は「白化」の思想に至った。白化の実行にセリヴァーノフ以上に熱心であったのは、彼の協力者シーロフでした。

セリヴァーノフは白化の思想ゆえにますますフルイストたちから憎まれました。彼らに迫害され官憲に追われての逃避行のあいだにも、彼は多くの信者を獲得した(つまり白くした)。しかしとうとうフルイストたちの密告により逮捕され、はじめトゥーラで投獄され、のちタンボフからソスノフカへ連行され、ここで笞刑に処されたことは前述のとおりです。

当時は受刑者を誰か屈強な男に背負わせて鞭打つのが習わしで、去勢派の言伝えによると、この時はイワン・プロクージンという農民が「十字架に代って」セリヴァーノフを背負い、もうひとりの信者が彼の頭を支えていた。受刑の際彼が着ていた血まみれのシャツは、リガの去勢派のカラーブリで聖物として保存され、「十字架の衣」と呼ばれました。セリヴァーノフが鞭打たれたのは1775年9月15日のことで、去勢派はこの日を贖主の受難の日として断食するのが常でした。去勢派は教祖の受刑をイエス・キリストの受難に見立てているわけです。

12

セリヴァーノフは一年半かかってイルクーツク県へ護送されましたが、その途次たまたま、捕縛され檻に入れられてモスクワへ護送されるプガチョーフとすれ違いました。エメリヤン・プガチョーフはピョートル三世(ピョートル大帝の孫で、エカチェリーナ二世の夫)を名乗り、1773年以来南ロシアの農民反乱を指導してきた人物です。ピョートル三世は1762年に半年ばかり帝位にあっただけの人物ですが、ドイツ育ちのプロテスタントで正教会を嫌い、分離派を擁護し、また多くの教会財産を剥奪して国家の管理に移し、そこに住む農民を国有農民とし、これが結果的に農民の地位の向上につながったことで、農民のあいだに非常に人気がありました。

やがて誰が言い出したものか、殺されたピョートル三世が実は生きていて、終身流刑囚コンドラチー・セリヴァーノフの名でイルクーツク県に身を潜めているという風説が、国中に広まります。ロシアは、贗ドミトリー(十七世紀初頭)をはじめ帝位僭称者を多く輩出する国であり、また宗教的贗キリストにも事欠きませんでした。ひとりでのこの両者を兼ねた例は珍しく、セリヴァーノフ以外にはいないようです。

セリヴァーノフが自らピョートル三世と称したものか、周囲の者たちがそういう噂を流

したものが、これははっきりしません。彼は『受難』で、シベリアへの護送途中プガチョーフとすれ違ったとは記していますが、自分がピョートル三世であるとは言っていない。しかし、彼がこの噂を否定したことも決してない。もっとも、たとえ彼が否定したところで、周囲はそれを信じなかったことでしょう。

去勢派自身は、セリヴァーノフがピョートル三世である由縁を次のように伝えています。民衆の間では、史実をめぐるこの種の異説が種々語り伝えられていたものであり、これは、ロシア史の去勢派ヴァージョンと言うべきものです。

父なる贖主（セリヴァーノフ）は聖神の藉身であり、清浄無垢の処女エリザヴェータ・ペトローヴナ（ピョートル大帝の娘、在位1741-61）から、神学者ヨハネの福音によって生まれた。女帝エリザヴェータ・ペトローヴナは聖なる生涯を送るべく神により定められていたから、帝位には二年しか留まらなかった。顔立ちが自分とそっくりなお気に入りの女官に統治を委ね、自らは女帝の衣を脱いで見すばらしい服を纏い、徒歩でキエフへ巡礼に出た。途中オリョール県でフルイスト派の真の信仰を知り、彼らのもとに留まってアクリーナ・イワーノヴナと名乗った。

未だペテルブルクにいた頃、彼女は息子ピョートル・フョードロヴィチを生み、ホルシュタイン（ドイツ北西部）へ養育に出していた。ピョートルはここで幼・少年時代を過ごし、去勢派信者となった。その後間もなくペテルブルグへ帰り、皇太子となり、結婚した。ピョートルの妻（のちのエカチェリーナ女帝）は、夫が去勢されていたがゆえに彼を嫌い、彼が帝位につくや数人の高官たちを抱き込んで、彼を殺そうとした。ピョートルはこのことを知り、やはり去勢派であった衛兵と服をとり替え、身を隠した。追手を逃れて三昼夜、彼は飲みも食べもしなかった。彼はペテルブルグの外国人居留民たちの間に紛れこみ、最後にモスクワで追手をまくことに成功した。この間にかの衛兵は彼に代って殺され、ネフスキー大修道院に葬られた。モスクワでピョートルはその「純潔」の教えを説きはじめ、その後実母たるオリョール県のアクリーナ・イワーノヴナのもとに赴き、コンドラーチー・イワーノヴィチ・セリヴァーノフと名乗った。彼に従っていたチェルヌイシェフ伯爵（一説にはダシコフ公爵）は、アレクサンドル・イワーノヴィチ・シーロフと呼ばれた。二人はロシア全土と諸外国を経めぐって純潔を説いたが、遂にトゥーラ県で捕らえられ、ソスノフカで鞭打たれたのち流刑に処された。すなわち、父なる贖主ピョートル・フョードロヴィチは東のイルクーツクの地へ、その先駆者シーロフは北のリガへ（つまりジナミント要塞）へ流された……

去勢派の言い伝えによると、その創始者たちはいずれも王室の出か高貴の生まれということになるのであって、のちのアレクサンドル一世やその弟コンスタチンも皆去勢された信者であった、とされます。これは、去勢派のかなりの部分を占めていた都市の商人や下級貴族らが、セクトの農民起源を嫌ったからであり、またこう称することが布教活動を容易にしたからであると言われます。（この章未完）

L'amour sexuel dans la pensée russe VII

Skoptsy russes 1

Les skoptsy dérivent des khlysty. Il faut savoir les khlysty pour savoir les skoptsy.

Est impropre le mot “flagellants”, traditionnellement adopté comme traduction du mot russe “khlysty”. La flagellation n’a rien à voir dans les rites de khlysty. C’est une corruption, peut-être intentionnelle, par des profanes du mot russe “khristy” (christs, forme plurielle de “khristos”). On les appelait “christs”, car ils ont produit beaucoup de christes parmi eux.

L’Orthodoxie russe se caractérise par son ritualisme très avancé. Le schisme de l’Eglise au 17^e siècle a eu lieu à cause de la réformation de rites assez minimes, et les vieux-croyants étaient aussi formalistes que l’Eglise orthodoxe. La secte de khlysty est une réaction contre cette formalisme de la religiosité russe.

Au centre des rites de khlysty se situe le “radenie” (danse collective), où participent tous les membres d’un “korabl” (collectivité locale, comme “loge” de franc-maçons. Ce mot signifie “vaisseau”). Par radenie, ils s’épuisent corporellement, reçoivent l’inspiration divine et prophétisent.

Les khlysty cherchent une fusion plus directe avec la divinité. Ils demandent que l’inspiration divine descende directement à chacun d’eux et que chacun d’eux soit l’incarnation de la Parole divine comme Jésus Christ l’était autrefois. Celui qui se considère comme récipiendaire de l’inspiration divine, est enclin à se considérer comme source de cette inspiration. Il est naturel qu’ils finissent par s’imaginer être un petit dieu ou un petit Christ. C’est ainsi que, parmi les khlysty, sont apparus beaucoup de christes et de Mères de Dieu. (à suivre)